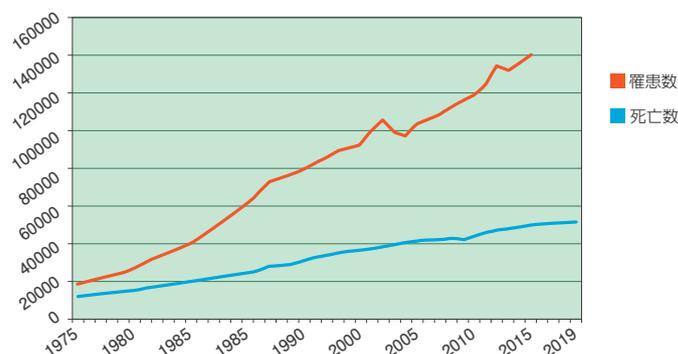


大腸がんに対する最新の内視鏡治療について 消化器内科 山口 真二郎

はじめに

大腸がんは全てのがんの中で罹患数は1位、死亡数も肺がんに次いで2位と日本人に非常に多いがんで、罹患数・死亡数ともに年々増加しています(図1)。大腸がん検診としては便潜血検査(2回法)が行われており、異常があれば大腸内視鏡検査での精密検査が必要となります。大腸がんの治療には内視鏡治療、外科的治療、薬物療法がありますが、早期に発見できれば体への負担が少ない内視鏡治療を行うことが可能です。

図1 大腸がん罹患数・死亡数の推移

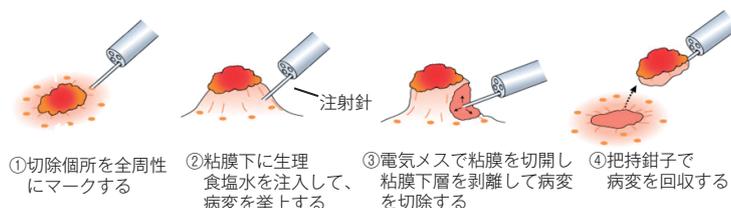


資料:国立がん研究センター対策情報センター「がん登録・統計」
Source: Cancer Information Service, National Cancer Center, Japan

早期大腸がんの内視鏡治療(ESD)について

早期の大腸がんに対する内視鏡治療は、通常はスネアと呼ばれる金属の輪を病変に掛けて締めて切除します。スネアで切除できない陥凹型の病変や大きな病変に対しては、内視鏡用の電気メスを用いた内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)(図2)という方法で切除しています。電気メスで病変周囲の粘膜を切開し、続いて病変直下の粘膜下層を剥離して切除する方法で、表面から浅い粘膜下層までにとどまっている病変であればサイズが大きくてもがん全体をひと固まりで切除することができます。ESDによる切除で、がんか否かを診断することや、病変の広がる範囲など正確な組織診断が可能となり、再発の危険性も低くなります。大腸は食道や胃と比べて壁が薄く屈曲も強いいため、大腸のESDは高度な技術を要するとされています。当院では様々な工夫を取り入れることにより、より安全で確実なESDを目指しています。また、鎮静剤や鎮痛剤を用いるためほぼ眠っている状態で治療を受けることができ、治療後もほとんど痛みはありません。これまで外科手術が行われていた大きな大腸腫瘍も、このESDという技術を用いると安全で確実に切除できます。外科手術に比べて体への負担は少なく、入院期間も短く、早期の社会復帰が可能です。

図2 ESDの手技



大腸がんの早期発見のため、検査を受けましょう!

大腸がんをはじめ、消化管がんへの内視鏡治療は進歩してきています。コロナ禍で大腸がん検診の受診率は下がっていますが、大腸がんの早期発見のためには、便潜血検査もしくは大腸内視鏡検査を受けられることをおすすめします。早期の段階であれば、大きな腫瘍でもより負担の少ないESDで治療が可能です。ご不明な点は、かかりつけの先生(消化器内科)にご相談ください。

関西ろうさい病院の理念

●● 良質な医療を働く人々に、地域の人々に、そして世界の人々のために ●●

病院運営の基本方針

- ・私たちは、働く人々の健康確保のための医療活動、即ち「勤労者医療」中核的役割を担ってこれを推進します。
- ・私たちは、高度急性期医療機関として良質で安全・高度な医療の提供を行うとともに、地域の諸機関と連携して地域医療の充実を図り「地域に生き、社会に応える病院」としての発展を目指します。
- ・私たちは、患者さんの権利を尊重し、医療の質の向上ならびに患者サービスの充実にも励み、「信頼され、親しまれる病院」作りを心がけます。
- ・私たちは、「開かれた皆様の病院」として、ボランティアや有志の方々の病院運営への参加・協力を歓迎します。
- ・私たちは、病院使命の効果的な実現のために「働き甲斐のある職場」作りを行い、運営の効率化と経営の合理化を推進します。



イメージキャラクター
かんろつこ

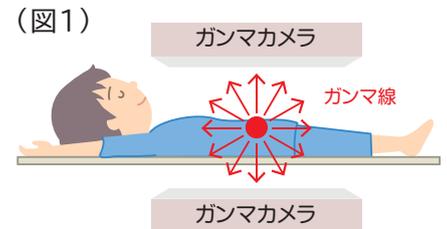
PET/CT装置が新型機種に更新されました。

核医学診断科 河田 修治

核医学検査とは

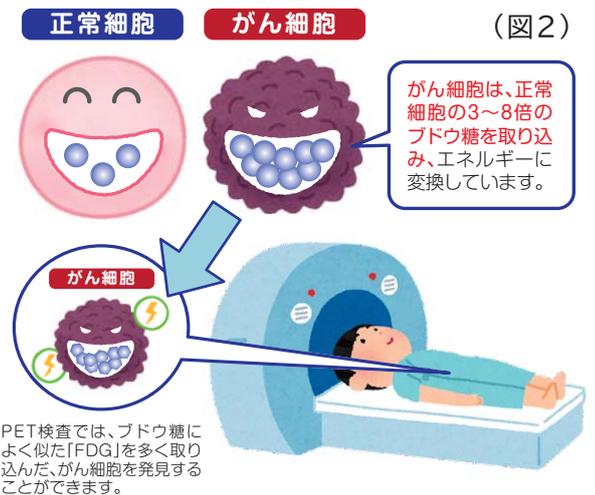
核医学検査とは、特定の臓器や組織に集まりやすい性質を持った放射性医薬品(ラジオアイソトープ)を使って、そこから放出される放射線(ガンマ線)をガンマカメラで画像化することにより体内の様子を調べる検査です(図1)。

CT検査やMRI検査は、主に臓器の形態の異常を調べるのに対し、核医学検査は、投与された放射性医薬品の分布や集積程度、経時的変化の情報から、形態だけでなく、機能や代謝状態を評価することができます。機能や代謝状態の異常をみることによって、病変の正確な評価が可能となります。核医学検査は投与する放射性医薬品の種類により、SPECT(スペクト)検査とPET(ペット)検査に分かれます。



PET検査

PET検査では、FDG(エフディージー)というブドウ糖に似た放射性医薬品を用いて、体内のブドウ糖の代謝状態を画像化します。FDGを静脈注射して、体内に十分に分布するまで安静に待機したのちに撮像し、主に悪性病変の評価に利用しています。がん細胞が他の細胞より多くのブドウ糖を摂取する性質を利用し(図2)、その分布を画像化することで、がんの有無や場所を調べます。PETとCTの両方の画像を同時に撮影することで、より正確にがんの大きさや形、位置を特定することができるため、悪性腫瘍の診断に極めて有効です。



最新のPET/CT装置(図3)

当院では2021年5月に従来型のPET/CT装置から、デジタル半導体検出器を搭載した最新型のPET/CT装置に更新いたしました。デジタル半導体検出器の導入によって、従来装置に比べて放射線(ガンマ線)の効率的な検出が可能となり、画質が飛躍的に向上しました(図4)。また、検査時間も短縮され、身体的な負担も軽減したといえます。

当院は地域がん診療連携拠点病院であり、常勤の核医学専門医がおります。また、当院をはじめ、PET検査を用いた人間ドックを行い、専門医が詳細な読影を行っている医療機関があります。(当院の場合は、健診部までご相談ください。)

PET/CT検査について詳しくは、近隣の日本核医学会専門医までご相談ください。

